

イギリス旅行記 1975年7月—9月

T. グレイをめぐる断片 (2-2)

1 部

バーナム と ストウク・ポウヂス

山 本 博 信*

Journal of a Literary & Historical Pilgrimage to the British Isles
July-September, 1975

Fragmentary Notes on Some Places Associated with Thomas Gray (2-2)

Part 1

Burnham and Stoke Poges (to be continued)

Hironobu YAMAMOTO

〔注〕本稿は、Stoke Poges Gardens 事務所の職員、ホズルさん(Mrs. Hodsoll),及び Stoke Poges Church の牧師、ハリス師 (the Rev. Harris) の助力に負うところがあったことを記して、謝意を表する。

2. Burnham

「グレイ・カントリと銘打つからには、話をその中心地ストウク・ポウヂズに移す前に、どうしてもバーナム (Burnham) に触れておくべきであろう。バーナムはファーナム・ロイヤル (Farnham Royal) なる南北に細長い小さな教区 (parish) をはさんで、ストウク・ポウヂズの西隣りに位置する大きな教区 (parish) である。北はベコンズフィールド (Beaconsfield), 南は新興都市スラウ (Slough) に接している。

1974年4月1日実施の県境界改正以前は、バーナムはストウク・ポウヂズなどとともにイートン地方郡 (Eton Rural District) を構成し、スラウ自治市 (Slough Municipal Borough) やイートン町 (Eton Urbane District) とともにバッキンガム県 (Buckinghamshire) に属し、その南端部に位置していた。が、改正実施にと

もない、バーナム、ストウクなど北側からスラウ市 (Slough M. B.) をだき込むように位置していたイートン地方郡 (Eton R. D.) は解体され、バッキンガムシャーとバークシャーの境界線はスラウ市 (Slough M. B.) の北へ移動された。解体されたイートン地方郡 (Eton R. D.) の南部のスラウ北部に隣接するごく一部はスラウに併合され、新たな自治市スラウ市 (Slough Borough) となる。イートン町 (Eton U. D.) とともにバーク郡 (Berkshire) へ変更になったことはいままでもない。バーナム、ストウク・ポウヂズなど大部分のイートン地方郡北部はその北のベコンズフィールド町 (Beaconsfield U. D.) と統合合併されて、あらたにベコンズフィールド郡 (Beaconsfield District) を形成し、バッキンガム県 (Buckinghamshire) にとどまった。まさしく最南端の県境になってしまった訳だ。District というのは County (県) のすぐ下位の行政区で、ある意味では日本の「町」、「村」より、「郡」に近い。ただ現在の日本の郡は数の上からも行政機能上からも衰退してしまい、その存在意義をほとんど失い生きる屍と化している。しかし英国の District は議会 (District Council) をもち行政執行能力を有し、その下にいくつ

* 宇部工業高等専門学校英語教室

かの parish (教区) を管轄し、今日なおよく機能している。parish は行政的には「村」という方が近いかも知れない。parish には parish council なる議会があり、これが地方自治体の末端という訳だ。新しいベコンズフィールド郡 (Beaconsfield Dist.) はバーナム、ストウク・ポウヂズを含めて12の parish (教区・村)*より成る。議員数42名のその議会 Beaconsfield District Council はバッキンガム県議会 (Buckinghamshire County Council) の管轄下にある。

バーナムは、1974年の行政区画改正で、前述の如くその大部分はストウク・ポウヂズなどと共にバッキンガム県にとどまり、行政組織上はベコンズフィールド郡を構成する12の教区の1つになっているが、しかしその一部、ファーナム・ロイヤルおよびスラウに境する西南部の一角、ブリットウェル地区 (Britwell Ward) は分離されて、ウェックサム (Wexham) 教区の一部とともに、**スラウに糾合され新しいバーク郡 (Berkshire) スラウ市 (Slough Borough) になっている。グレイがバーナムに関係したのは主としてこのブリットウェルであった。だが、グレイとの関連でブリットウェルに言及する場合、このブリットウェルは新規のスラウから切りはなし、旧来のバーナムの一部として扱ってもよからうと考える。その歴史的つながりから云っても、また「バーナム・ビーチズ」やそのほかグレイがよく訪れたその近隣の森林は、いまなお変わらず、バーナムであることから云っても、少くともその方が便利であるから。

グレイがケンブリッジをやめて大陸旅行に出かけた1739年9月3日までに、おそらく何度か訪問し滞在したと思われる家がバーナム・ビーチズからほど遠からぬブリットウェル (Britwell) にあった。グレイがバーナムに関係し、バーナムの自然に親しむのもここを機縁としている。しかし現在知りうる資料から、グレイがバーナムに滞在したことが明らかなのは、前稿でも述べたように、1736年夏このバーナムはブリットウェルの母方の伯母夫婦ジョナサン・ロジャーズ (Jonathan Rogers) 宅に滞在したという1回ばかりだ。ジョナサン・ロジャーズは事務弁護士 (attorney) で、1710年43才の時グレイの母の長姉アン (Ann Antrobus) と結婚している。ア

* Stoke Poges Gardens の事務所の Mrs. Hodson の資料によると、12の parish は次の通り： Beaconsfield, Gerrards Cross, Denham, Hedgerly, Fulmer, Toplow, Burnham, Farnham Royal, Stoke Poges, Wexham, Iver, Dorney.

** Municipal Year Book による。

ンはジョナサンより9才年下だが、それにしても晩婚である。彼等がいつ頃からこのブリットウェルの家に住むようになったかは不明である。たぶん若い頃はロンドンのシティ (City) あたりに住んでいたのではないかとと思われる。のちに、夫ジョナサン・ロジャーズに先立たれたアン伯母が Gity の Bishopgate の St. Botolph Without 教区に家屋敷を遺産として残していることから考えても十分ありうることだ。

ブリットウェルのこの家はキャンツ・ヒル (Cant's Hill) というところにあった。キャンツ・ヒルという地名は現在でもバーナムに残っている、とケットン・クリーマーは1955年の「グレイ伝」でいっている。* 元来、アントロバス家の長兄ロバート・アントロバス (Robert Antrobus, グレイの母方の伯父) が賃借権 (lease) をもっていたものを、1730年に没したロバートがその姉アン (Mrs. Rogers) にその賃借権を譲与したものであった。この家は小さな家で、キャンツ・ホール (Cant's Hall) と呼ばれていたようだ。ロバート・アントロバスはこの家屋敷をその遺言書** の中で、'Goldwins House and grounds at Cantshill near Burnham'

(バーナムの近くのキャンツヒルにある ゴールドウイン の ハウス 及び地所) といっているが、W. コウル (William Cole) *** はバーナム教区教会の牧師をしていた当時、この家をキャンツ・ホールと呼んでいるところをみると、一般にはそう呼ばれていたものと思われる。「ロジャーズ氏は、彼〔マノイ〕の伯父で、弁護士。バーナム教区のブリットウェルに住んでいて、今は自分〔バーナム教区〕の教会に葬られている。…彼はキャンツ・ホール (Cant's Hall) という家に住んでいた。小さな家で、共有地から遠からぬところにあった。キャンツ・ホールはいまもブリットウェルにあると思う。」**** これは、ジョナサン・ロジャーズがキャンツ・ホールを去り、この世を去ってから30数年を経た1775年、コウルのバーナム教区教会の牧師在任中の言である。コウルはロジャーズに直接会ったことはなく、これを聞きつたえに書いたものと思える。キャンツ・ホール

* R. W. Ketton-Cremer : Thomas Gray, p. 282

** Peterhouse Admission Book

*** William Cole (1714-82) : グレイ、ウォルポウル等の友人。Vicar (non-resident) of Burnham (1774-82), 1770年より Milton に住す。

**** Correspondence of Thomas Gray, 3 vols.

(Oxford, 1971), P. 47 n. 3. (以後、この書簡集は Cor. と略記す。

なる家は‘いまもブリットウェルにあると思う’という断言をさけた言い方が、はやくも1775年にこの家のその後の運命を象徴しているように思える。現在ではこの家の確認はできないのである。

この家にはロジャーズ夫妻が住むようになる以前に、伯父のロバート・アントロバスが住んでいたものと思われる。彼はケンブリッジの Peterhouse を出て30年もの間イートンで教師をつとめ、生涯独身であった。家庭に不和の絶えない妹ドロシーの子グレイに、ことのほか目をかけたこの伯父は、少年グレイに質素清貧の精神をたたき込み学問の手ほどきをしたといわれる。のちのグレイに多大の影響を与えたといわれる。バーナムはグレイの母親のふるさとともいわれ、E. ゴス (Edmund Gosse) * は彼女をバッキンガムシャー女 ‘a Buckinghamshire lady’ と云っている。また、バーナム教区教会にはアントロバス家の墓がある。これだけでもアントロバス家がバーナムにゆかりのあることが察せられる。しかも、ロバート・アントロバスがブリットウェルに借権 (lease) をもっていたということは、彼の生前にすでに、この地にアントロバス家の人が住んでいたということを示すものであろう。イートンの教師だったロバートが長期間継続的に、このバーナムのキャンツ・ヒルに住めたかどうかは疑問だが、少なくともある時期から、彼はバーナムに居宅をもつようになったものと思われる。親か**ジョナサン・ロジャーズ夫婦か、ほかに妹が同居したことがあったかも知れない。ロバートは不幸な家庭環境から幼少の甥グレイを救いだすために、「バーナムの自分の家に引き取ったらしい」とゴスは云っている。*** 引き取られたか否かの真偽はともかくとして、ケンブリッジに入って2年目の1736年夏、間違いなく訪ねたバーナムのこの家に、イートン時代の少年グレイがすでにたびたび滞在していたであろうことは想像にかたくない。1730年、伯父ロバートが亡くなると、この家はアン伯母 (Mrs. Rogers) が受けつぎ、伯母夫婦が新たに (あるいはひよっとすると引きつづき) 居住するところとなる。定かではないが、1739年頃まで彼等ははこの家において、ストウク・ポウヂズのウェスト・エンドへ移転して行くことになる。それはグレイの大陸旅行出発と相前

後している訳だが、その間グレイは、証拠資料こそ発見されていないが、このバーナムの家を毎年のように訪ねたものと思われる。1736年夏だけは、すでに云ったように、バーナムから出した書簡が二通ほど現存している。その日付けは一方は8月、他方は詳しく9月26日となっている。8月の方は8月何日か不明だが、それにしてもかなり長い滞在だ。おそらくこの程度の滞在を毎年くりかえしたのであろう。そしてキャンツ・ヒルのこの家を根城に、静かな田舎の生活にしたしみ、バーナム・ビーチズ (Burnham Beeches) に代表される近隣の山野を跋渉し、そこにやすらぎを覚えることを習慣とするようになったにちがいない。この家は、グレイ自身が云っているように、「東バーナム公有地」 (East Burnham Common) から半マイルばかりのところにあった。その「バーナム公有地」というのは、今日の東バーナム公園 (East Burnham Park) のことであって、ファーナム・ロイヤル (Farnham Royal) 教区との区境にある。この「東バーナム公園」の北にいわゆる‘バーナムの森’ (Bunnham Beeches) が隣接して広がっている。前稿でも引用した1736年8月の同じ手紙は、グレイが親しく分け入ったこのバーナムの自然林の有様をよく伝えている。

・・・ぼくは伯父のところに居る。彼は頭で空想するだけの大狩猟家です。犬が何頭もいて、家中の椅子という椅子をことごとく占領するので、ぼくはいつも仕方なく立ったままで書いています。で伯父は痛風のため原野に出て犬の後をおって駆けることができないものだから、彼は犬どもの心地よい鳴き声やにおいに飽きもせず、ずっとその耳と鼻を楽しませています。彼は、どうも、ぼくが馬にでも乗ればよいのにぶらぶら散歩するとか、猟にでも行けばよいのに本など読んでいると云って、ぼくをひどくバカにして困る。こうした中であってぼくのすくいは、緑の小径を半マイルばかり行ったところに、ぼくが独りじめにできる「森」(土地の人間は入会地 ‘Common’ と呼んでいる) があることです。少なくとも独り占め同然なのだ。それというのもぼくはその中で、この自分のほかに人間らしきものはなにも見ることがないからです。そこは山と崖が雑然とごちゃごちゃに入りまじり、ちょっとした混沌状態です。なるほど、山は雲より上にそびえることは余りないし、その斜面も‘ドーヴァーの断崖’ほど大したものではないが、ぼくほどにその峰々を愛する人でもなければ誰も敢えて登ることのないよ

* E. Gosse : Thomas Gray, p. 2

** ただ、父親 William Antrobusは、グレイの父親同様、‘Citizen and Scrivener of London’ だったらしい。

*** E. Gosse ; Thomas Gray, p. 3

うな山です。そして懸崖は見た目にも楽しく実際以上に危険に思えるほどです。谷間も山も一様にこよなく古いぶなの老木やその他いろいろの威風堂々たる古木がおおって、そしてその老木古木は、ひどく年老いた老人のように、おのれの昔の身の上話を吹く風にいつも夢み心地にくりかえしてばかりいる。

そうして、その霜をいただく頭をたれて物語る、
ささやくような声で、暗い運命の定めを。
すると、ものの姿がもろもろに、詩人の目には見えて、
一葉一葉にとりついて、大枝ごとに群をなす。

この手紙からでも、グレイの観察がこまかく、この田園の自然にいかにも慣れしたしんでいたかが分かる。バーナムのぶなの樹林をこのように見事にえがいたのはグレイが始めてであり、「バーナム・ピーチズ」が有名になったのはこれ以後のことだ。グレイがこの地でこうした樹林がかもす自然の神秘を発見して驚き、心のやすらぎを覚えたのは何もこの時がはじめてではあるまい。おそらくはロバート・アントロバス伯父の生前中のイートン入学時から、すでに10年近くもグレイはこのバーナムの自然に接して来ていたと思われる。グレイの自然に対する感覚と態度を確立しその自然観の根になったのは、いわゆるグレイ・カントリ (Gray Country) の自然であるが、このバーナムの自然こそはグレイ・カントリの自然を代表するものだ。グレイはその自然観の大半をバーナムで体得していたと云ってよい。彼がこのバーナムの自然にどのように接したかは、前稿引用の書簡文に充分うかがい知ることができる。グレイの逗留していた伯父ジョナサン・ロジャーズも、前のロバート・アントロバス伯父に劣らず、グレイをよく可愛がったといわれる。グレイは子供の頃から運動を苦手としていて、じっと家にとじこもっているような不活発な静かな子供であったという。この手紙にもあるように馬にも乗れない。ロジャーズ伯父はそういうグレイの男児としての臍甲斐なさを歎いて、つまらんやつだとよく叱咤するほどであった。実際、グレイは馬は苦手な、生涯一度も馬に乗ったことがないとグレイがこぼしたことがあるとW. コウルも云っている。グレイの方でもジョナサン・ロジャーズ伯父には親愛の情浅からぬものを感じていたことは確かだ。彼は1742年10月21日、ストウク・ボウデスのウエスト・エンドで亡くなり、バーナムの教会のアントロバス家の墓所に葬られた。その大理石板にはラテン語による碑文があるというが、その碑文はグレイが撰したとされている。

1736年の夏には、グレイはこのバーナムで文学史上興味深い体験の一つを得ている。20才前の若きグレイが当時有名だった老劇作家トマス・サザーン* に、こともあらうにこの田舎で邂逅したのだ。それを前掲引用の同じ書簡の結び近くでグレイ自身が述べている：

ちょっと離れたところにあるさる紳士の邸宅にサザーン氏がきていて、よく遊びに来ます。彼は当年77才で殆んどすっかり記憶を失くしていますが、老人としては実に好もしい人だ。どうもぼくにはそう思えるのです。彼をじっと見ていると、イザベラ** やオールノーコウ***が頭に浮んで。

サザーンは近所の知人宅を訪ねていたのだ。彼は86才の1746年まで生きながらえるが、ドライデン(J. Dryden)時代の唯一人の生き残りであった。グレイはドライデンを敬愛し、後にはその作品から引用するほどであったから、色々この老作家に大詩人のことをたずねたに違いない。余り記憶していることはなかったとグレイは云っているが、サザーンによりグレイのドライデンへの関心は一層高められたかも知れない。サザーンはすでに多数の喜劇を書いていたようだが、特に、「宿命の結婚一別名罪なき不貞」(1694)、「オールノーコウ、つまり高貴な奴隷」(1696)によって、文学的名声をとどめていた。この2つの当り狂言は後の大衆的メロドラマの先駆とも云うべきものであった。メイソン(W. Mason)の言によると、「グレイはいつもサザーンのペースを高く評価してはいたが、同時に彼はあの悲喜劇(Tragi-Comedy)なる得体の知れない類の作品を作り出すために、無分別にペースを茶番劇にないまぜる彼の悪趣味は批判していた。」という。ともあれ、今日から考えてみても、バーナムの片田舎での若き文学青年グレイと名の知れた老劇作家との出会いは、いかにも劇的であり、不思議な驚きだ。それはバーナムに於けるグレイの文学的意義を象徴する出来事でもある。

* Thomas Southerne (1660—1746), dramatist. アイルランド出身。ダブリン、トリニティ大卒。

** サザーンの作品 *The Fatal Marriage, or the Innocent adultery* (1694, 「運命の結婚, 別名罪なき不貞」)の主人公

*** サザーンの作品 *Oroonoko, or the Royal Slave* (1696, 「オールノーコウ, つまり高貴な奴隷」)の主人公。

3. Stoke Poges

ジョナサン・ロジャーズ伯父夫婦はどういう理由からか、バーナムのブリットウェルから3マイルばかり東のストウク・ポウヂズ (Stoke Poges) のウェスト・エンド (West End) に居を移した。グレイがストウク・ポウヂズにかかわりをもつ始まりはこの伯父夫婦の転居による。ストウク・ポウヂズは、現在 'Stoke Poges' が定着しているが、簡略には、単に 'Stoke'。グレイの時代には、紛わしさを避けて、それに near Windsor をつけて 'Stoke, near Windsor' というか、'Stoke Pogis', あるいはハイフンを入れて 'Stoke-Pogis' を通例用いるかした。その他、Stoke Pogeis の綴りも見られる。グレイは簡略形の 'Stoke' をもっとも多く用いているが、メイソンなど一般には 'Stoke(-)Pogis' を好んで用いている。E. ゴスなどもその著 *Thomas Gray* (1882) では 'Stoke Pogis' を用いている。

このストウク・ポウヂズの地名は二つの地名 'ストウク' と 'ポウヂズ' が組合わさって出来たことは言うまでもない。'Stoke' *は 'Stock' (<OE, *stoc trunk, stump, rod*) に同じで、'stockade' (棒杭の防御柵) のこと。つまり、'stockaded place' (棒くいで防御柵したところ) を意味し、アングロ・サクソンの砦、防塞があった場所を示す。この棒杭で防御柵をめぐるしたところ 'Stoke' が今日その名をとどめている地名は、ブリテン島だけでも30を下るまい。そのため、Devonshire の Stoke のような例外もあるが、たいてい何かつけて、互の混同を防いでいる。たとえば Stoke Bruerne (Nthn.), Stoke-upon-Trent (Staffs.), Stoke Mandeville (Bucks.) の如し。Stoke Poges も古くはサクソン人の城砦があったことがうかがわれ、その城主に Harold 王の家臣シレット (Siret) の名が今日に伝わっている。ノルマンの征服後20年の1086年、ウィリアムフィッツ・アンスカルフ (William Fitz-Ansculf) なるものがこの地に封ぜられ、荘園を開いた。彼はまた、領内にノルマン様式の教会 (Norman Church) を建てたらしい。それが今日グレイの眠るストウク・ポウヂズ教会の興りになっている**。このウィリアムは「ストウ

クのウィリアム」(William Stoches)として知られた。

こうした「どこそこ(地名)のだれそれ(人名)」という人の氏名のつけ方は、あるいは人類共通なのかも知れない。今日我々と西欧人とでは氏名の順序が逆であるが、それはただ言語構造、とりわけ語配列の相違によるものと思われる。我々は、たとえば「豊田の小次郎」という言い方をする。それが「の」をとれば「豊田小次郎」となる。「ストウクのウィリアム」は 'William Stoches', つまり 'William of Stoke' となる。それが 'of' をとれば 'William Stoke' となる。なにか彼我の名前の言い方の相違が分かるような気がする。

ところで、William Stoches から200年後のエドワード一世 (Edward I) の治世に、荘園の女継承者 (heir-ess) アミーシヤ (Amicia), つまり 'Amicia de Stokes (ストウクのアミーシヤ) が、「ポウヂズのロジャー」(Roger de Pogeis [or Pogeys]) という県代表役 (Knight of the shire) をしていた男を婿にした。以来、この地をストウク・ポウヂズ (Stoke Poges) と呼ぶようになった。グレイの時代の綴り 'Stoke Pogis' もうなづけようというものだ。稀れではあるが 'Stoke Pogeis' の綴りがあったても不思議はない。

ストウク・ポウヂズは「ノルマンの征服」以後、荘園より発達した村である。19c中期まではまだいくつかの集落が教区内に点在するだけであった。手許の統計*では1801年の人口は741。これはグレイの時代と大差あるまい。1851年には1,399, 19c末には3,175と、前世紀に急増加した。これは産業革命、鉄道建設(1838)による影響である。元来は今日のスラウの一部はストウク・ポウヂズの教区に含まれていて、スラウが新興都市として増大するにつれて、ストウクの南部は今世紀に入って3回もスラウに糾合されている。面積も19c中頃に比して3分の1近く小さくなってしまった。現在の人口はおおよそ5,000 (1971年の統計で4,895)。

すでに述べたように、今度の74年の改正ではストウクは大した変更もなくバッキンガムシャーにとどまって、パークシャーのスラウとは無縁になった筈だ。しかし現在なお、郵便区分 (postal address) はスラウである。とにかく、このバッキンガムシャーとパークシャーの境界線問題は数年の時間では片付きそうにないほどの論議を呼んでいる、とストウク・ポウヂズ公園管理事務所の Mrs. Hodsoll は云っている。こうした問題を現在のス

* OED には次の如し: OE. *stoc* neut. (gen. *stoces*); prob. f. the same root as *stoc* (c masc. (gen. *stocces*) *Stock sb*¹. <cf. *Stock sb*¹. [OE. *stoc* (c masc., corresp. to OFris. *stok* tree-trunk, stump, OS. *stok* (Gallée) stick, pole...)] >

** 教会で入手したパンフレットによる。

* *The Village School Education in Stoke Poges* (by John Tarrant, Stoke Poges Parish Council, 1976)

トウク・ポウヂズはかかえている訳だ。この先どうなるか見守りたい。

ロンドンには比較的近いとはいえ、この片田舎のストウク・ポウヂズがイギリス国内はおろか、遠くアメリカや日本にまでその名を知られているのは、荘園領主の館や米国ペンシルヴァニアの祖ウィリアム・ベン(William Penn)一家や彼等がその基をひらいたストウク・パーク(Stoke Park)の大ゴルフ場のためでは決してない。それは言わずと知れた詩人 T. グレイと彼がこの地に永遠に残した詩人自身の魂と影のためである。

グレイがこのストウクに関係をもつようになったのは、この地に伯母夫婦があり、母親が住していたからであり、それが長く持続できたのは荘園主コッパム夫人(Lady Coham)一家の存在も無視できまい。しかし見方を逆にして、大学に身分を置かず*に、メイソンが回顧して云っている「母親と伯母たちの存命中は彼は夏期休暇をストウクで過ごす**」ということが仮になかったら、どうだろうか。母親は今眠る教会の境内に眠ることになっただろうか。それより先に、同じ墓に眠る伯母メアリー・アントロバス(Mary Antrobus)は同じそこに葬られたであろうか。すぐ隣のバーナムの教会(parish church)にはアントロバス家の墓がある、そこに埋葬されても何の不思議もない。そう考えれば、ストウクに於けるグレイの存在が母や伯母を終生そこに居つかせ、骨を埋めさすのに無縁だったともいえない。同様に、ストウク・ポウヂズに母や伯母やコッパム夫人がなければ、ストウク・ポウヂズのグレイもまた存在しなかっただろう。詩人と彼女等は互に支え合って立つ二本の棒の関係にも似ている。彼女等がみな死んで亡くなると、彼はまるで青年のような思切りをみせて、住みなれたウェスト・エンド・ハウスに見切りをつけて飛び出し二度と寄りつかなくなった。それも、「突如、中年男(middle-aged man)になり、柔軟性を失った」と、E. ゴスに云わせたあの25才の1742年から18年間も、毎年5、6月から10、11月まで、長い年は半年近くも過ごしてきたストウクの家をだ。疑いたくなるほどだ、一度くらい愛する母の墓参に帰らないのかと。なつかしい思い出を追って、こっそりとでも村里に近づいてみたことはないかと。今までのところ全然その形跡は発見されていない。彼はただ各地に

* 例えば、1755年、友人ウォルポウルは Earl of Bristol at Lisbon の秘書の口を世話したが、グレイは辞退している。

** *Memoirs of Gray's Life*

知友をたずね、土地土地の自然を求めて歩いた。彼は死んでストウク・ポウヂズへ帰ろうと心にきめていたのかも知れない。そして、その時までのうたかたの一時を運を天にまかせてさまよってしようとしているようにも考えられる。が、なぜかその生き様はあわれでならない。彼はストウク・ポウヂズの女性たちを失った時、死をおそれなくなったのではなからうか。彼女等だけではない、他にも身近かな身内や友人を亡くしている。ひょっとしたら、その暗い辛い現実が死後の世界になにか淡い心やすまる期待をいだかせていたかも知れない。死や墓地が当時の主要な主題になっていたとは云え、「エレジー」(Elegy)に長い年月をかけて、あれほどに手を入れて完成させたこと自体が、グレイの死に対するその特別な感覚を物語っているといえる。

グレイの死水をとった友人のブラウン (James Brown) は、近づく死に気付いていながら、グレイはこの世を去る不安を何も決して口に出さなかった('He never spoke out.') とホートン (Thomas Wharton) への手紙*で述べている。ストウクと縁を絶って一、二年後の1761年頃書いたと思われる「自画像」'Sketch of His Own Character'の中で、「大智恵者でもなく、神なるものを信じていた」と告白している。これは実に意味深長な言葉だが、つまらぬ人智を振りまわし、それに溺れることなく、大自然の摂理を受け入れ、これに従おうとする意気込みを窺わせる。それは死を怖れずそこに安らぎを見いだして、これを甘受しようとするグレイの死に対する態度を暗示している。また、死に到るまでのうたかたの一時に対しては、「地位」「名声」「栄華」を追い求めず、ただ運を天にあづけてさまよってしようとするグレイの生への態度が、そこには的確に示されている。端的にいえば、それは「エレジー」の中でグレイ自らがうたっている姿だ：

狂おしい衆生のみにくい争いを離れて
つましい彼等の心は迷うことを知らなかった。
つめたい奥まった人生の谷間に沿って
ひっそりと己が道を歩み続けたのだ。

グレイとストウク・ポウヂズのかかわり合いは、グレイの魂の遍歴の象徴であったといえる。'白い憂鬱'の1742年にはじまり、コッパム夫人の死の病の1759年を限りに終わったばかりではない。さらに10有余年の後1771年に'その疲れた魂'を'父なる神のみ胸にゆだねて、ここ(ス

* 1771年8月17日付け。

トウク)に大地の膝を枕に眠っている'のだから。

グレイがストウク・ポウズズをはじめて訪ねたのは1742年5月28日ということになっている。それは彼がその前日の27日、あの有名な“ぼくのは白い憂鬱”の手紙をロンドンより親友ウエストへ出していて、その後半部で「田舎へ行く」(‘I am going into the country for a few weeks,’)といい、この手紙の最初の編者メイソンがこのくだりに「ストウクの親戚を訪問」(‘Upon a visit to his relative at Stoke’)と、わざわざ註を付していること、また6月17日付けでストウクより友人アシュトン(T. Ashton)にあてて、ウエストの死亡を確かめる手紙の追伸で、「田舎へ来て3週間になるが、2日したらロンドンへ帰る」といっていることなどからの推定である。

グレイは同行のウォルポウル(Horace Walpole)との不和で2年半におよぶ大陸旅行を打切って、前年41年9月ロンドン帰着。それから3ヶ月ばかり後に父親のPhilipがロンドンで亡くなり、その年の冬はロンドンで久しぶりにウエスト*との旧交を温めて過した。それは翌年42年3月に法学に見切りをつけたウエストがロンドンを離れて、HatfieldのPopesの友人デヴィッド・ミッチェル(D. Michell)宅へ向うまで続いた。その後も失意の二人の交信はしきりで、6月3日にはグレイはストウクから「春のうた」をウエストへ書き送ったが、それが開封されないまま、転送されてきて終止符を打つ。ウエストは6月1日急死していたのだ。

だが、グレイが帰国後ストウクをはじめて訪ねたとされているこの1742年5月28日以前にも、彼はストウクを訪ねているかも知れない。グレイが大陸旅行へ出る前よく滞在していたバーナムの伯母夫婦が旅行中にストウクへ移転して、しかも長の別れのあとロンドンとは目と鼻の先のそのストウクへ帰国後9ヶ月近くも無沙汰をきめ込むのは、少し不自然なような気がする。大陸旅行といえば、当時は庶民には高嶺の花だ。みやげ話の一つや二つ親しい伯母夫婦に話してきかせても悪くない。もっとも、父親が帰国後間もなく亡くなった時、あるいはそれとは別に、伯母夫婦がロンドンへ出て来て会っていたかも知れない。いずれにせよ、これは憶測でしかない。証拠は何もない。現在、知りうるところでは、グレイがストウクをはじめて訪ねたのは1742年5月28日であること

* 法学院 the Temple にいた。法律に向かず、また母親が父親の秘書ウィリアムと通じるなど失意のうちにロンドンを引上げ、Popesの友人宅で3ヶ月居候の後、Hatfield Churchのchancelに埋葬。

は前述の通りだ。この時は20日余りの滞在で切り上げているが、それから1ヶ月と経たない7月中旬に再びストウクへやって来て、今度は二ヶ月近く滞在している。そしてこの時は3篇の詩*を書いている。この年グレイがロンドンへ帰りケンブリッジへ復学して(10月21日)間もなく、ストウクの伯父ロジャーズが亡くなる。行年75才。彼の死はグレイの人生観をかえた、とゴスは云っている。この伯父ジョナサン・ロジャーズの死後しばらくして、子供もなく夫に死なれて独り身になった伯母の家へ彼女の妹たち、つまりグレイの母ドロシーと未婚の伯母メアリーの二人が、ロンドンの店をたたんで移り住んだ。こうして1742年も終る頃には、グレイには、母姉妹三人が一つ屋根の下に暮すという新しい状況がストウクに出来てしまう。以後、1759年ついにその足跡を絶つまで、次頁の図表にもあるように毎年ストウクでの母と伯母に囲まれての生活がつづく。が同時にその近親の女性たちを次ぎつぎと一人残らず、失って行くことになるのである。1749年には、まず、未婚の伯母メアリー・アントロバスが、次に慈悲深くやさしかった母が1753年に、そして1758年には未亡人のアン伯母が死んで逝く。グレイのストウク・ポウズズの生活は本来ならこれまでであった。このアン伯母が死ぬとすぐ、グレイは住みなれたストウクの家を引き払って、ケンブリッジはそのままにロンドンへ生活の場を移す手筈を始めた。1759年7月には住居をロンドンに移してしまった。これは一般には当時開館を控えていた大英博物館の利用が目的だとされている。しかし事実は反対でロンドンへ出ることが目的だ。大英博物館はそれに付随して生じたことのようなだ。彼はケンブリッジは好きでなかった。かといって、みんな逝ってしまったストウク・ポウズズに閉塞して、悲しい思いに浸ってばかりいるのもたまらなかつたのだ。それにアン伯母から遺産として500ポンドと家屋敷を手に入れたばかりでもあった。しかし、ストウクには未だマナー・ハウスの主人コップム夫人とスピート嬢がいて、「エレジー」を契機に1750年以來、親しい間柄になっていた。D. セシル**も云う如く、ストウクに滞在中はマナー・ハウスで多くの時間を過ごすのがグレイのきまりになっていたほどだ。そのコップム夫人も1760年3月20日に亡くなるのであるが、彼女がいればこそ、グレイのストウク滞在は1759年にまで持ち越されたのだ。

* Eton Ode, Sonnet on the Death of Richard West, Hymn to Adversity

** Lord David Cecil: Two Quiet Lives

	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sept.	Oct.	Nov.	Dec.
1741												(6)父死亡
1742						28	19	15		15		●(1)友人 West 死亡。 ●(2)伯父 Rogers 死亡。
1743							23		30			
1744							8		5			
1745					12				13		7 22	
1746							13			10		
1747					8 22			16		23		
1748				8							5	
1749					21	27			14 26		23	●(5)伯母 Mary 死亡。
1750						3					15	
1751						6		2				
1752							21			13		
1753		22		13						4		21
1754						16			27			
1755				24		15		1			26	
1756						16						3
1757						17						
1758						29	31					12
1759	15		4			29	9			23 15 18		
1760						28	21 29			6 (Hanover-Square)		
1761						15	11		8		19	●(12)スピード結婚。

ストウク・ポウヂズ滞在表

図表中の線端の数字は日を表わす。

■ : Stoke Poges (但し, ロンドン滞在, およびその他の地への訪問を含む場合もある)
 ○ : London. ~ : Cambridge(但し, 1742年から1758年までの在住は省略した。) :::: : 旅行(但し1760, 1761年のみ)

グレイの最後のストウク滞在はもはやウエスト・エンドの家 (West End Cottage) ではなく, コッバム夫人のマナー・ハウスであった。それは9月23日から10月15日までのきわめて短いものであった。8月の終り頃, コッバム夫人は元気になった旨, 一緒に暮していたスピード (Miss Speed) がロンドンのグレイに言ってよこしている。それでも心細いのか, お願いだから是非とも Stoke House(マナー・ハウスのこと)へ来て欲しいといい, グレイとその使用人のベッドがいつでも用意してあるとも書いている。当時, グレイは使用人をつれて歩いていたらしい。伯母アン(ロジャーズ夫人)の servant はそのままグレイに引きつかれている。グレイは仲々腰をあげない。9月18(火曜)になってグレイはロンドンの Southampton Row からホォートンへ手紙をやり, コッバム夫人が死にそうだから, 月曜日にストウクへ行く, とようやく重い腰をあげようとしている。実際には, それより一日早く日曜日の23日にストウクへ赴いた。それを裏付けるかのように, 10月6日付けのメイソンあての手

紙はコッバム夫人邸ストウク・ハウスから書かれている。つづいて同月27日付けのグレイがジェニングズ夫人*にあてた手紙は, コッバム夫人のロンドン邸宅 (Hanover-Square にあり) から出されていて, コッバム夫人の診察に付添ってスピード嬢と一諸にロンドンへ出て来たこと云っている。最後のストウク・ポウヂズ滞在を終えて来たのだ。それもストウクでコッバム夫人と別れて帰ったのではなく, ロンドンへ一緒に出て来て, 彼女の邸宅に滞在して付添っていたのである。グレイはジェニング夫人にその病状を伝えている: 「小康状態。どうともいえない。例によって少し食べすぎの感あり。呼吸は(たいてい夕方だが)時々短かくなり, ふさぎ込むことあり。発作的息切れはない。ストウクで訴えていた胃の差し込みもない。睡眠不足(熟睡は1, 2時間だけ)。薬は色々

* Henry Jennings (1739年没) の未亡人。コッバム夫人, スピードの友人。1753年より娘スザンナ Susannah とシップレーク・ハウス (Shiplake House) に住す。

かえた。新たな症状ができれば気をつけて報告する。医師はダンカン博士 (Dr. Duncan) がついている。」11月24日にはロンドンの自室 (Southampton Row) から従妹のメアリー・アントロバスへ手紙をやり、はじめストウクにコッバム夫人を見舞い、その後本人の希望によりロンドンの彼女の家で先週まで付添っていたといっている。また、病状は一日一日と悪化して、死が近づいているとも云っている。その4日後の11月28日に、同じロンドンの居所からホオートンへ書いた手紙では、コッバム夫人を見舞いについて3週間ばかりいた、そして夫人がロンドンで医者に見て貰うというので、一諸にもどって10日前まで頼まれてハノーヴァ・スクエアの彼女のところに居たと云っている。病名は **dropsy** (水腫病) という病気で、死にそうになっているというから、よほど重くなっていたものと思われる。コッバム夫人はこれからなお3ヶ月余り生きつづけるが、グレイは11月18日までロンドンのコッバム邸に付添っていた訳だ。これがグレイのストウク最後の滞在の結末であった。この乞われて出かけて行った1759年9月23日から10月15日までの3週間の滞在を最後に、グレイはストウク・ポウヂズに生きて姿を見せることはなかったのである。それを表わすにはグレイ自身の言葉がもっともふさわしい：「ある朝、いっもの丘に彼の姿が見えなかった／例のヒースの繁る荒地にも、彼の好んだあの木の近くにも。／次の朝が来た；けれども彼はいなかった、小川のほとりにも／あの芝地にも、あの森にも彼はいなかった。」(「エレジュー」, 109—112行)

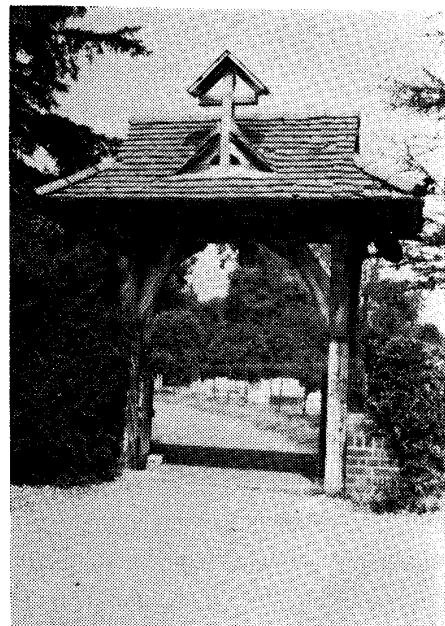
筆者がこのストウク・ポウヂズをおとずれたのは、夏の陽射しの暑い屋前であった。それはグレイの命日の前日7月29日だった。バスが自動車道 M4 からスラウ街道を抜け、車窓の両側の視界が緑の樹林でさえぎられるあたりはもうチャーチ・レイン (Church Lane) だ。やや上り勾配でゆるやかに右へ左へカーブするたびに、緑のトンネルをなす両側の木々の枝がバスを撫でる道はまさしく laneだ。200年余り昔の1771年8月6日、グレイの亡骸をのせた霊柩馬車 (hearse) が後に黒ずくめの会葬者用葬儀馬車 (mourning coach) 一台を付き従えて、この教会への道をしずしずと辿ったのだ。E・ゴス*によると、その葬儀馬車の中に乗っていた遺族、会葬者は遺言報行人の J・ブラウン (James Brown)、従妹のメアリー・アントロバス (Miss Mary Antrobus**),

* E. Goss, *Thomas Gray*

** グレイの伯父 William Antrobus の次女。のちに1786年、Thomas Richardsonと結婚。

その妹ドロシー (Dorothy) の夫カミンズ氏*, それにグレイと親交深かったというケブリッジのクライスト・コレッジの若い紳士 'a gentleman of Christ's College' の4名であった。彼等はいずれもケンブリッジ在住の人たちだった。グレイの遺体は一旦ロンドンへ出て、ロンドンからこの日運ばれて来たのだった。バスは教会入口で道路の反対側にある駐車場 coach park に入った。

Stoke Poges Parish Church of St. Giles はやる心を落付けて、コーチ・パークを出て反対側へ道路をわたると、そこはうつそうと樹木に囲まれながらも少し広々とした感じの空地になっていた。そしてそれが樹林の中へ狭く細くなって奥へつづいていた。4.50mも行くと急に樹林がひらけ、行く手に丁度日本家屋の入母屋造りを真横からみるような屋根が四本の木の柱に支えられて、高く周囲に抜きんでてみえた。それは赤茶けた小さな瓦で葺かれ、棟にはあの丸っこい蒲鉾形の棟瓦が使われてあった。一瞬目を疑うほどだった。その屋根のど真中に木の十字架が立てられ、それにまた木で小さな屋根がさしかけてあるところがまた異様であった。



第一墓地門 (lychgate) Stoke Poges Church

そう古くもなく、どちらかというといふ貧相にさえ見えるこの和風のリッチゲイト (lych gate) は、イギリスの典型的田舎の教会には不釣合いのようにさえ感じた。墓地

* Richard Comyns. 2年前の1769年7月31日に Dorothy と結婚したばかり。ケンブリッジの Little St. Mary 教区の出で、商店主。

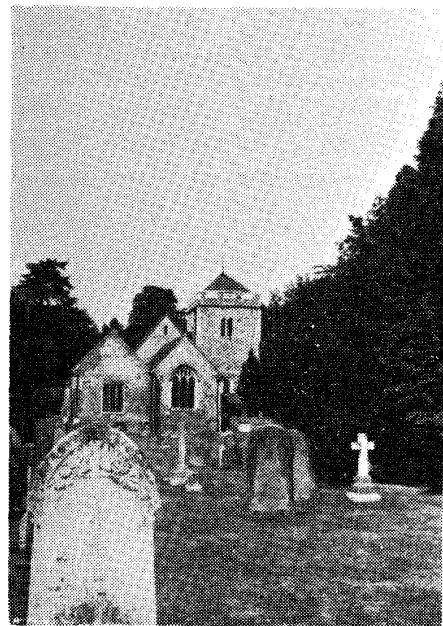
門の左手（南側）にバラの花にうずまったような小さな建物が木の間越しに見えた。その時は牧師館かと思ったが、これがチャーチ・コテージ（Church Cottage）であった。ちなみに、牧師館は Park Road にあり、現在のその主は the Rev. C. Harrisだ。この和風の山門から先は道がコンクリートで舗装され、すぐ先でこの舗装路は左へぐっとカーブして、その行く手は視界から消えていっているのが、山門を通して見えた。山門を潜ると、そこはぱっとひらけて教会の境内（churchyard）だ。緑の芝土に白い墓石が散在していた。コンクリートの参道がその中を左へ大きく弧をえがいて伸びていた。この区域は境内の墓地が狭くなって新しく拡張された区域だという。墓石が白い訳だ。そのカーブした参道の両側には、最近植えたと覚しき若木が頭に傘のように丸く枝葉をつけて、1, 2メートル間隔に続いていた。その向うに唐門風の屋根の三角形が見えた。さらにその奥には樹林に囲まれて赤い三角屋根を頂いた白い四角のノルマン風の塔が聳えていた。旧知の友に会するような懐しさが湧上るのを禁じえない。これがあの塔なのだ。「向こうのつたのからまる塔から／心をふさいだふくろうが月に向かって泣いている／おのが秘かな隠れ家の近くを歩きまよって、／古来独り住んできたおのが地、犯すものありと。」（「エレジー」、9—12行）。現在、つたこそ取払われてないが、その付まいはふくろうの一羽も鳴いて不思議はない感じを十分にとどめている。唐門風の三角屋根をもつ門は古びて堂々とした墓地門だった。いくつか英国の教会を見たが、これほど立派な山門は他にはなかった。屋根は第一の入母屋のリッチ・ゲイトとちがって、切妻で縦向き。破風にはすかしの彫り細工が施されて精巧な出来だ。日本の寺院や城閣に拵えても異和感を覚えぬほどだ。今では二つ山門がある訳だが、これが本来のリッチ・ゲイトで、ここでグレイの亡骸は司祭に迎えられるに違いない。この唐門から先きはコンクリートの参道はまっすぐに教会入口にまで達している。最初の和風山門から見えたノルマン風の塔をもつ教会は、グレイが「エレジー」によりみ込んだといわれる境内の墓地（churchyard）をへだてて、正面奥の右（北）すみに樹林にいだかれるようにしてひっそりと建っている。塔の左側に赤い三角屋根三つを寄せ合せて建っているこの教会は、左（南）半分はレンガ造りで赤茶色、右半分はフリント石（flint、黒白のメノウのようにつるつるした火打石）と割栗石（rubble）で出来ていて、青白く見えるのはその歴史を示すものだ。ゴスは1882年の著書『Thomas Gray』で、教会の南側を見ると白い建物 Stoke

Park House が左手の牧草地に見えるといっている。その昔はこの教会の境内からは周囲に眺望がきいたものと思われる。当時の教会の写生画をみても周囲に樹林は殆んどない。しかし今日の境内は周囲ぐるりを樹木でおおわれていて、その外は一切見えない。左手（南側）の樹木越しにレンガ塀が垣間見えたので、レンガ塀がめぐらしてあるものと思われる。境内内部は最初の境内とちがって墓石の白い新しいものが目につかない。苔や地衣がついて墓標は黄味を帯びたり、黒ずんだり、傾いたりしていた。台石のない墓標 headstone だけの墓もある。グレイがうたっている通りだ。

‘あのごつごつしていかついニレの木の下、あのイチイの木の蔭に／芝土はいくつもの塵骨の山をなして盛り上り、／おのが狭い密室に永久にめいめい横たわり、／この村の素朴な先祖たちが眠っている：／…

また、‘ちょっとしたこわれやすい墓標が今なおそばに立って／下手な詩や拙い彫刻で飾られ／過ぎ行く人の溜息のたむけを求めている。’

（Elegy, 13—16；78—80）



境内墓地より教会を望む Stoke Poges Church

グレイもまたこの境内に‘とわに横たわり、眠っている’（‘for ever laid…sleep’）。現在、第二のリッチゲイトを抜けると、塔の南にくっついて建っている教会の建物の二つの色ちがいの東壁面（East End）が見える。その二つの壁面に各々窓（East window）が見える。

二つのうち左(南)側のレンガ造りの壁面にある窓の下に、他の墓標とちがって、箱型のレンガ造りの墓標 (brick box tomb) が二基並んで見える。この一対の左側(南側)がグレイ母子と伯母メアリの墓だ。右側の方は1756年から94年までこの教会の牧師をしていたダックワース神父 (Rev. Duckworth*) のものである。1794年の埋葬である。彼は生前グレイと多少交際もあった。ダックワース師の息子で海軍大将のジョン・トマス・ダックワース (Sir John Thomas Duckworth, 1748—1817) は、牧師一家(父母と兄と自分)はよくマナ・ハウスへ食事に招かれたと、後に云っている。また、当時8才か10才位だった彼は父親についてグレイの住むウェスト・エンドを訪ねた、その答礼にグレイが牧師館へやって来ては、自分がイートン校生 (Etonian) というので、よく1シリングとかハーフ・クラウンとかの小遣いを自分にくれたとも語っている。** 1771年8月6日のグレイの埋葬式はダックスワース師が司祭したことであろう。当時「エレジー」の作者として名を馳せていたグレイを彼は大いに尊敬していたにちがいない。そういう気持がダックスワース師をして、自らをグレイのそばに葬らせたものであろう。左隣りのグレイ母子のものと同じで、赤レンガを積み上げて作った高さ1メートルあまりの長四角な箱形の上に大理石板 (marble slab) が載せてある。その大理石板の墓碑銘を見ないと、見分けがつかないほどだ。それほどまでにダックスワース師はグレイに傾倒していたのかも知れない。

グレイ母子の墓は1749年にグレイの伯母メアリ・アントロバスが死んだ時、母ドロシーが自分のその姉のために建てたもので、4年後の1753年には自らも同じ墓に眠ることになった。その同じ墓の中に眠る母親のそばに、遺言により希望して、グレイもよく乾いたオークの棺におさめられて葬られた。このレンガの四角な墓塔の上のひび割れた大理石板には、次のように書かれている：

In the Vault beneath are deposited, /in Hope of a joyful Resurrection/the Remains of/MARY ANTROBUS/She died unmarried Nov : 5, 1749/ Aged 66.

In the same pious Confidence, /beside her friend

* the Rev. Henry Duckworth, vicar of Stoke Poges (1756—1794)。ハリス師のパンフレットでは‘1754年’からになっている。

** cf, Cor., p. 332

and sister, /Here sleep the Remains of/DOROTHY GRAY/Widow, the careful, tender Mother/of many children, one of whom alone/had the misfortune to survive her. /She died March 11, 1753/Aged 67.

(下の納骨堂に／よろこびの復活を願って／メアリー・アントロバスの／遺骸が安置さる。／1749年11月5日未婚のまま没す。／享年66才。

同じ敬虔なる思いをいだいて／その友であり、姉である人のそば、／ここに眠る、／ドロシー・グレイ／寡婦、数多くの子供を慈しみ育てたやさしい母。／子供のうちただ一人が不幸にも、その後生き残る。／1753年3月11日没す。／享年67才。)

この母ドロシーの碑文はグレイ自身の撰といわれる。いかにも母思いのグレイらしく、母を失なった悲しみとともに母親への追慕の情が切々と伝わって来る。グレイの母への思いは終生変わらず深くやさしかった。1749年、母が若い時から常に一緒に暮らして来た未婚の姉メアリ伯母を失った時も、その知らせを受けるとすぐに、グレイはこの母親へケンブリッジから手紙を出し、伯母をおもい母をいたわっている。「母上より只いま受け取りました悲しい知らせにぼくも同じく驚き、心をみだしています」と。母親が死んだ時は、彼がその埋葬を見届けている。彼女は朝のうちに(‘Sunday morning’)息を引き取ったという。68才であった。グレイはどう間違えたか、母親の年を1つ若く刻している。母親の死後ほどなくして、77才の伯母ロジャーズ夫人が中風で倒れ、この年の秋その看護に再びグレイはストウクに帰省している。この帰省中にメイソンにあて手紙をやり、「ストウクに居ると昔のことが思い出される」とこぼしている。グレイは母親のことをいう時は殆んどきまって、溜息まじりに話したという。これより少し前の9月、グレイが母を亡くして半年ばかり後、グレイは父親を失った同じメイソンに手紙を送り*、まるで自分の悲しみを慰めるように、次のように、その悲しみを慰めている：「長い間、目と心が親んで来た人を失うことが、どんなものであるか私は知っている。それで私はその人を亡くした時の思いを決して忘れたくないし、君にも忘れてもらいたくない。」それから13年後の1766年、若い友人 N・ニコルズ (Norton Nicholls) の母親の病気が回復したと知

* 1753年9月21日。

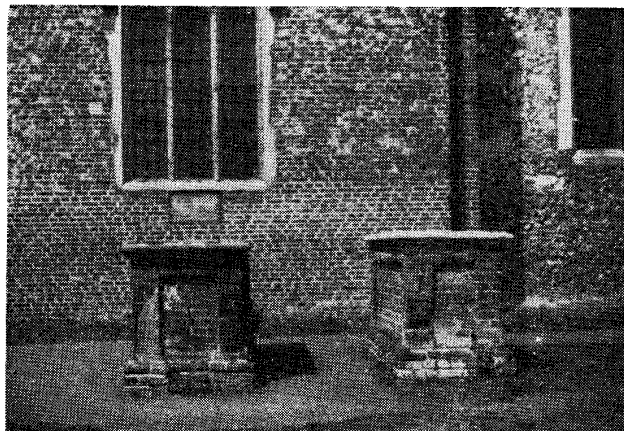
って久しくして、ニコルズへ手紙をやった折りに、グレイは本当だったら母親の世話をよくするように手紙をするつもりであったのだがと前置きをして、次のようにニコルズを諭している：「…一生涯に人はあとにも先にも母親はただ一人しかいないということです。貴君は分りきったことで、いわゆる陳腐な常識だと思うかも知れない。でも貴君はまだ青くさい青二才だ。私もその年頃には、貴君と（ほとんど）同じ程度にはものは知っていた。それなのに私がこのことに気づいた時には、（私は十分な証拠と自信をもって云うのだが、）もうおそすぎました。それは13年前のことです。が、つい昨日のようにしか思えず、こうして私の生きている今なお一日一日と、それは私の胸の奥深くへ重く洗んで来るのです。」これは若いニコルズへの諭しというより、グレイ自身の年とともに深まる母親へのやさしい思慕と自責の念だ。のちにグレイがケンブリッジで亡くなった時、彼の部屋で母親のガウンなど衣服がトランクに手をつけられないで、母親が遺して逝ったままになっているのが見つかった、とメイソンは云っている。それほどまでに母を思うグレイだから、母のそばで永遠の眠りにつきたいと願うのは何の不思議もない。

だが、伯母を入れて母子三人で眠るこの墓には、当のグレイの墓碑銘だけではない。伯母と母二人の碑文でふさがって、墓石の上の大理石板に、スペースがないためだという。それにしても、どうにかならなかったものか。わずかに墓標の向いの東窓（East Window）の窓枠の下に、レンガ壁に埋め込まれた小さな大理石板がグレイの埋葬を示している：

OPPOSITE TO THIS STONE/IN THE SAME
TOMB UPON WHICH HE HAS/ SO FEELING-
LY RECORDED HIS GRIEF/ AT THE LOSS
OF A BELOVED PARENT/ ARE DEPOSITED
THE REMAINS/ OF/ THOMAS GRAY/ THE
AUTHOR OF/ THE "ELEGY WRITTEN IN A
COUNTRY CHURCHYARD"/ HE WAS
BURIED AUGUST 6th : 1771.

（この石の向い、／愛する親を失って／その悲しみをいとも切々と刻している／同じ墓の中に／安置される／は／トマス・グレイ／「田舎の教会墓地にて詠める挽歌」／の作者。／1771年8月6日埋葬さる。）

この石板はコッバム夫人の後の荘園主ペン（Penn）家



グレイ母子の墓（左）とダックワース師の墓（右）

の二代目 John Penn の刻。おそらくは教会の北東、墓地門を出てすぐのところにあるグレイ記念碑（Gray's Monument）と同じ1799年ころの埋め込みか。1930年頃の写真を見ると、この石板（tablet）は窓の下枠を台にして窓に取り付けてあるのが分る。石板は何度かその位置を変えたかも知れない。グレイの埋葬記録は教会過去帳（Parish Register of Burials）に次の如し：

'1771—Thomas Gray, Esq., was buried—August 6th.'

現在は教会ではなく、バッキンガムシャーの県文書保管事務所（County Archivist's Office, County Offices Aylesbury, Bucks.）に保管されている。グレイの埋葬にはケンブリッジから4人の会葬者があったことはすでに述べた。その中の一人に Pembroke の学寮長で友人の J. ブラウンがいたのは、埋葬に立会うためであった。彼はメイソンとともに遺言書（Will and Testament）で遺言執行人（executor）に指名されていた。遺言書は二人の執行人のうち一人は埋葬に立会うことを求めている。あいにくメイソンの所在が掴めず、ブラウンがその任を引受ける羽目になった。彼はこの立会いを「気の重い憂鬱な仕事」といいながらも、「メイソンがいないから自分がしなければならない。それもほんの数日中に進めねばならない*」と、死亡翌日の31日に云っている。多分、5日頃ロンドンへ向けて発ち、6日にロンドンからストウク・ポウチズへ入ったものと思える。メイソンは York をはなれ、Bridlington Quay（または Key）に遊んでいた。メイソンの言によると、グレイ死亡後「まる10日もたって」、その静養先のブリドントン・キーンで受取った手紙の束の中にブラウンからの

* 1771年7月31日、ブラウンが T. Wharton へあてた手紙。

知らせを見出して、事の次第を知るといふ不覚をメイソンはとった。E. ゴスによれば、それは実際は7日頃だったという。驚いたメイソンはすぐにハンバー川 (the Humber) を渡り、押っ取り刀でその翌日にはケンブリッジに着いている。それは8日か9日であったと思われる。メイソンのやや誇張した言に従えば、10日(土)ということになる。メイソンがブラウンによやく会えたのは、ブラウンが葬儀より帰着したこの10日のことであった。翌11日(日曜日)、遺言検認に二人でロンドンへ。12日(月)、検認をおえてケンブリッジに再び帰着、13日(火)、14日(水)はアントロバス家へ家具分配、その暇々に本の荷造りをして、ブラウンの学寮長宿舎 (Master's Lodge) へ運ぶ。17日(土)には遺言で譲り受けた一切の書類をヨークへ持ち帰る。手紙は分類して、生存者には返すとメイソンは言っている。

こうして、 그레이の死後は一切が彼の遺言に従ってすすめられた。その遺言書の写しが教会の中の壁に掲げられている。その概略を次に記す：

トマス・ 그레이の財産処分に関する遺言書

(The Last Will and Testament of Thomas Gray)

「神の御名において、かくあれかし。私こと、ケンブリッジ大学ペンブルック・ホールのトマス・ 그레이は、今は精神健全にして身体健康なれど、この至福にいつまで浴せられるやも知れず、次の通り、これをもって私の遺言書とする。」と、書き出す。

第一に遺体の埋葬場所：

「私はバッキンガムシャーはスラウの近く、ストウク・ポウヂズの教会境内に、今は亡き我がいとしき母の手になる納骨堂に、うち張りもそと張りもしないで、よく乾いた櫛の棺に入れて、母の遺骸が眠るそばに置かれることを願う。そして(もしあまり迷惑でなければ)私の遺言執行人の一人は私とその墓の中に葬られるのを見届け、また上記教区の勤勉実直な貧者に、総額10ポンドをしかるべく適当に喜捨願えたらと思います。」

次に親族への遺産：

カルカッタの George Williamson (父方のまたいとこ)*1) —— 그레이の名儀だての額面 500ポンドの利率累減年賦公債 (Reduced Bank Annuites)。

Anna, (Lady Goring, 父方のまたいとこ)*2) ——

*1) 東インド会社勤務で、ベンガルのカルカッタ在。インドより英国へ帰国の途中、謎の行え不明となる。

*2) Sussex 在。

500ポンドの利率累減年賦公債及び大きな青と白の古い陶磁器の壺一對。

Mary Antrobus (母方のいとこ)*3) —— ロンドン、コーン・ヒルの聖ミカエル教区の家屋敷*4)。ただし、その半年払いの賃貸金年額65ポンドから、伯母の Mrs. Jane Olliffe に年20ポンドを死ぬまで払うこと。さらに、グレイ・伯母オリフ夫人共同名儀の600ポンドの新南海年金。ただし、これからストウク・ポウヂズの Graves Stokeley*5) へ年5ポンドを支払うこと。また、死亡時にグレイの勅任教授職の奉給の未支給金がある場合*6)は、その未支給金すべてを贈る。

Mrs. Dorothy Comyns (同じく母方のいとこ、上のメアリの妹) —— グレイ名儀の額面600ポンドの旧南海年金、300ポンドの4分利付き年賦整理公債 (4 per cent Bank annuities consolidated, コンソルトともいう)、及び200ポンドの3分利付き年賦整理公債 [コンソルト] を贈与。

つぎは友人、知人への遺贈で、次の通り：

Richard Stonehewer —— 額面500ポンドの利率累減年賦公債*7)とダイヤモンドの指輪1個。

Thomas Wharton —— 500ポンドの利率累減年賦公債とダイヤモンド指輪1個。

*3) グレイは間違えて、second cousin (またいとこ)と書いているが、母の弟 William の次女で正しくはいとこ first cousin。ケンブリッジ在任、未婚、次のドロシー・カミンズもグレイは間違っている。このメアリの妹なので first cousin。

*4) グレイの生家、父親より相続した家。1748年に火災に会い、グレイが建直している。遺言書の書かれた当時は Mr. Norgeth (perfumer) なる人物へ賃貸。

*5) もとアン伯母の召使い。伯母の死後、グレイに仕える。1759年使用人仲間のメアリ (Mary Godfrey) と結婚して、グレイの許を去り、同じストウクの Nan's House に小店を開く。グレイの言及する新南海年金600ポンドはアン伯母からの遺贈。

*6) 俸給は年400ポンドで、半年払いであった。しかも何パーセントかの事務手数料又は税金として控除された額が支給されていた。ちなみにグレイへの1771年3月支給の £186.14s. は、この死亡の年の前期分だったと思われる。

*7) Reduced Bank Annuitiesはグレイ死亡当時は額面 (par value) をかなり割っていたという。(Cor., p. 1277, n.3)

次にグレイの召使いスティーヴン (stephen) への一項がある：

Stephen Hemstead—50ポンドの利率累減年賦公債と、グレイの死ぬまで仕えた場合に、グレイの衣服下着類一切。

この召使いスティーヴンへの規定はグレイの心のやさしさを示すものであろうが、スティーヴンはグレイの死ぬ少し前に、結婚してグレイの許を離れたらしい。ケンブリッジでパブ (pub) を開いたようだ。しかし、グレイ危篤に接し、死の前日の7月29日夜、旧主人の介抱にかけつけている。それをグレイが大いによろこんでいたとJ. ブラウンは伝えている。このスティーヴンへの条項の後半部が果してどう処理されたかは詳らかでない。グレイのこの遺贈は当時であっても、特記に値するものであったか、翌年ドッズレー (Dodsley) から出版された「年鑑1771年」は8月6日の欄*にグレイの埋葬を記載し、この召使いへの遺贈に言及している。「8月6日—『田舎の教会墓地のエレジー』の作者、かの有名なる故グレイ氏の遺骸は、その遺言に従ってウィンザーに埋葬せられた。氏は他の数ある遺産の中に、スティーヴンなる忠実な召使いにも一項を残している。彼は数年間グレイの許に仕え暮っていた。」このスティーヴンはグレイとの縁故からか、主人の死後間もない同年9月28日には、古巣のペンブルック学寮に butler (執事。食堂、酒蔵等食事関係を取りしきる使用人頭) として登用されている。

つづいて、前掲の二姉妹 **Mary Antrobus, Dorothy Comyns** に再び言及：

特に記したものの以外の食器、時計、指輪、陶磁器、夜具 (bed linen), 食卓用白布 (table linen) とケンブリッジのグレイの部屋にある家具は、メアリとドロシー二姉妹で等分のこと。

以上、現金の遺贈はなく、すべて債券、見込み歳入で贈与していることは興味深い。このあと再び友人への遺贈を記載規定している：

William Mason —「自分のすべての本、原稿、硬貨、印刷又は手書きの楽譜及び一切の書類。保存するも破棄するも本人の自由。」 ('all my books, manuscripts, coins, music printed or written, and papers of all kinds, to preserve or destroy at his

* *THE ANNUAL REGISTER, or a view of the HISTORY, POLITICS, and LITERATURE, for the YEAR 1771.* London, J. Dodsley, 1772. p.132

own discretion.')

William Mason 及び **James Brown*** — 借りと葬儀費用を支払った後の動産 (主として現金) の残余は二人で折半。ただし、200ポンドは施与** (すでに、両名に通知済み) してもらいたい。

この著名な学者詩人の遺贈に、メイソンはひどい戸迷いと責任を感じたものと思われる。彼は早くもヨーク帰着から10日後には、友人のホートン (T. Wharton) にあてて、「故人の友人たちの助言と援助がなければ、自分には荷の重すぎる重大な責務です」と云っている。彼はその後およそ4年を費やして、これら遺稿、書簡などの書類をまとめ、1775年に「グレイ氏の生涯と著述の想い出」 (*Memoirs of the Life and Writings of Mr. Gray*) を詩集に付してヨークとロンドンから出版し、その責を果たした。これは書簡をつないでその生涯を語る形式をとり、最初の本格的グレイ伝であり、最初のグレイ全集でもあった。グレイの友人のコウルは当初メイソンなどその適任者ではないと云って、役に比して役者の力不足を危惧する風が当時周囲にあったことを感じさせるのであるが、一旦、この全集が出てみると、その出来ばえに満足の意を表明している。メイソンはこれにより面目を施し、男をあげる訳だが、彼には人にいえぬ苦勞があったにちがいない。

遺言書は最後に遺言執行人を指名してこう結んでいる：

「そして、私はここに、この上記二名のウィリアム・メイソンとジェイムズ・ブラウンを、私のこの遺言書の共同執行人に選任し指名する。また、もし私の親族の誰かまたは他の受遺者が上記執行人の任務執行に不服をととなえたり訴訟を起こそうとした場合は、その者または者たちに私が贈与したすべての遺産形見を法で許される限り取消し無効とし、それを私は、長く私が受けて来たその誠意と厚情に対し、私の真の意向と意思を最もよくお汲み取り頂ける上記、執行人にして残余受遺者 (residuary legatee) たる二氏に分与する。

右、証拠としてここに本日署名捺印する。主の年1770年、7月2日。」

* この遺言作製当時はペンブルックの president (副学寮長)。このすぐ後1770年12月に master になる。

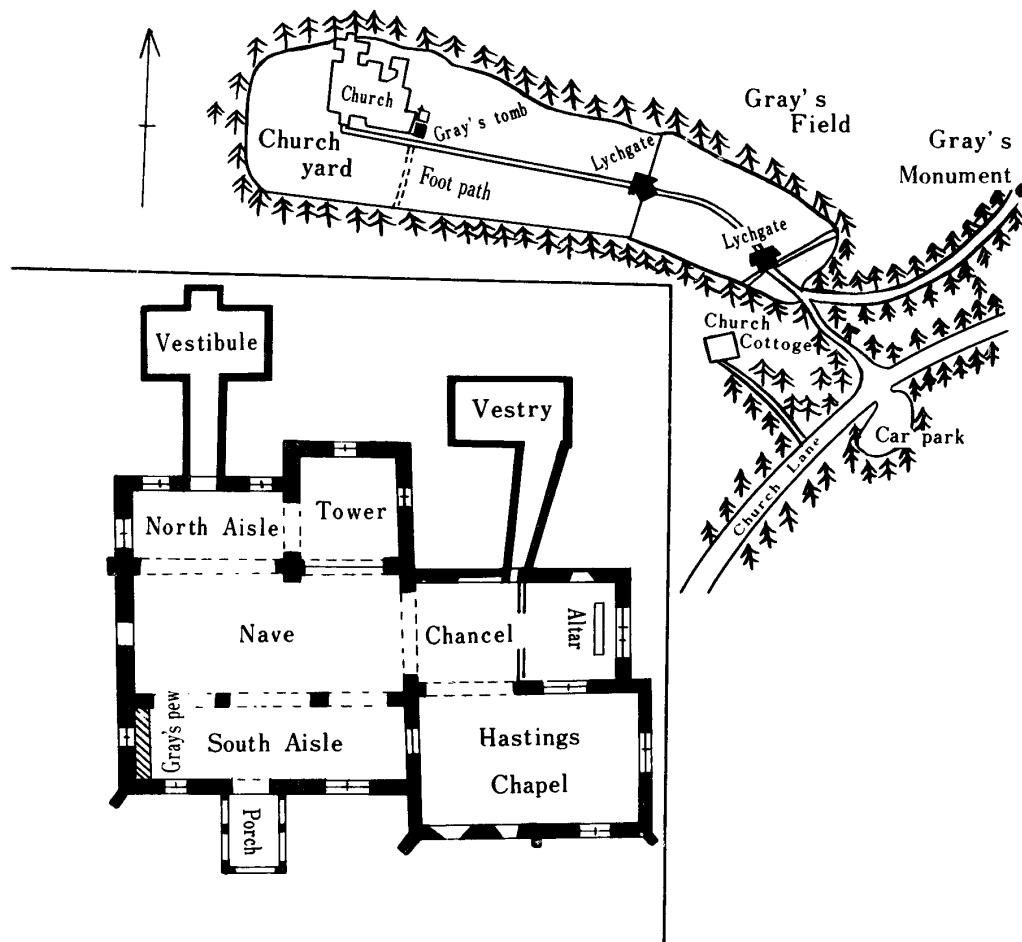
** 200ポンドの寄進が誰 (または何) に対するものであったかは不明。ケットン・クリーマは日蔭者の生活をしてきた友人 Tuthill の生活扶助ではなかったかといっている。(Ketton-Cremer: *Thomas Gray, a Biography*; p. 148)

このあと、遺言書を立合い立証する旨の記載があり、副署人 (witness) のペンブルック学寮の同僚研究員 (fellow) 3人の署名とトマス・グレイの署名押印をもって、グレイの書いた遺言書は終わる。ロンドンのサマセット・ハウス (Somerset House*) にあるグレイ自筆の写真版からの写しを**みると、これにグレイの7月30日死亡が登記され、メイソン、ブラウンの宣誓により遺言書の効力と両執行人の遺産処分権を認定するという、8月12日の検認が付されている。教会内に掲げられていたグレイの遺言書は、カンタベリー遺言事件裁判所 (Pre-rogative Court of Canterbury) の記録簿からの抜粋とあった。グレイの友人のW. コウルはグレイ自筆の遺言書は羊皮紙 ('skin of parchment') に書かれていたと云って、その内容をウォルポウルに伝えている。

8月6日埋葬に立合ったブラウンは、10日(土)になって

ようやくロンドンからケンブリッジへ帰って来て、待ちわびるメイソンに合流。翌日の日曜日の11日、二人揃ってロンドンへとんぼ返りして、月曜日の12日にやっと検認を受ける訳だが、メイソンは自分の不覚は棚に上げ、この検認のおくれの責任をブラウンに押しつけ、ブラウンのとった行動を非難の目で見ている：「これは時間の不要にして莫大なロスだ。だが、あの慎重なブラウンの性質を満足させるには、我々二人が揃うのを待つてやるしかなかったのだ。」*

境内のグレイ母子の墓を左にみて、教会の赤レンガ南壁面にそって一直線に西へのびる小径は、南側廊 (South Aisle) 西寄りつきより南に突出する赤屋根の教会入口ポーチ (porch) に達する。このあたりは墓石が散在しイチイ (yew) の大木が生茂り、屋なお暗き感じだ。



ストック・ポウチズ教会

* 1547年頃、護民官 (Lord Protector) サマセット公 (Duke of Somerset) がストランドに建てた豪邸の跡に、18c に建てられた官公庁。戸籍本署、内国税収入局などと共に遺言検認登記本部 (Principal Probate Registry) がある。

** Cor., p. 1286.

* 1771年8月18日付けの Wharton あての手紙。

この教会の文献上最古の言及は、1107年にロンドンのサザークの**St. Mary Overie**の小修道院 **priory** に移管された記録だという*。しかしそれ以前、サクソン時代にすでにこの地に礼拝堂があり、現在、内陣 **chancel**の一部にその跡があるという。ノルマンの征服後、1086年頃、その跡地にノルマン教会が建てられた。現在の内陣および塔 (**tower**)の一部、支柱 (**pillar**) にその跡をとどむ。その後13c 初めに、このノルマン風の支柱にゴシック風の本堂 (**Nave**) が再建され、北廊が修築され、大体現在見る教会の原形が出来上がったようだ。現在の教会の大部分は、赤レンガの部分を除き、1331年にこの地の荘園領主になった貴族モウリンズ卿 (**Sir John de Molines****) が、1340年頃これら既存の建物に手を加え修復したもので、各時代を混淆した14c 建築という訳だ。グレイ母子の墓のそばの赤レンガの部分は16c になって1558年、時の領主ヘイスティングズ公 (**Lord Hastings**) の増築建立したものだ。ヘイスティングズ礼拝堂と呼ばれる。現在、外からみて、四角いノルマン様式の塔のほか、三つの赤屋根が見えるのは、このヘイスティングズ礼拝堂、内陣と祭壇、および本堂と側廊のものだ。

入口のポーチが何時代のものかは不明だが、グレイの時代からあった。巾3メートル、奥行き5メートル余りのポーチは木造だ。赤い屋根を頂き、両側は1メートルばかりの高さのレンガ壁で囲ってある。正面からみると、入口の左右に二本のオークの柱ががっしりと構え、あの墓地門を長くしたような感じで古いことが分る。両側壁のレンガからみて、ヘイスティングズ礼拝堂と同時代のものかも知れないが、そのオークの柱は700年も風雨にさらされているというから、最初期からあったのかも知れない。グレイもこの同じポーチを日曜日毎に幾度か潜ったにちがいない、と思うと感慨あまりある。こうした長いポーチも珍しい。通路内側のレンガ壁の上は木造の美しい格子が入っていた。そのポーチの通路に店が出ていて、観光客相手にみやげものを広げていた。教会とグレイのパンフレットを各1部求めて中へ入る。

ポーチを中に入ると、そこは南側廊 (**South Aisle**) だ。正面に大きな支柱が二本、白漆くいで化粧して、がっしりとアーチ形の栗石で固めた壁を支えている。そこが本堂 (**Nave**) だ。その奥にさらに二本の同様な支柱がある。そこから向うが北側廊 (**North Aisle**) だ。側

廊から本堂、そして側廊へと木製の箱形の信徒席 (**pew**) がきちんときれいに並んでいた。小じんまりとした教会内に、大きな支柱と化粧壁の白、むき出しの天井の丸太の梁、荒削りな割栗石の壁と対照的に、ぎっしりと並ぶ **Pew** の木が放つあめ色の光沢の繊細さが印象的だ。南側廊の左奥に「グレイの席」 (**Gray's pew**) がある。ここは教会の西端南隅に当たる。その壁にグレイではなく、ベン一家の多くの名前を刻んだ **tablet** があった。グレイの遺言書の写しは、黒い額縁に入って、ここではなく中央付近だったかと思う。この「グレイの席」が本当にグレイ専用の家族席であったかどうかは疑わしいが、現在ではかつての特定の家族専用席はなく、どの席にでも座れるという。西端の角だけに他の座席より半分程度は広いこのグレイ専用席は、いかにもグレイにふさわしい。ポーチから入るなり誰の目にとまることもなくそのまま左へ折れてその奥へ行けばよいこの位置は、引込み思案のグレイなら、好むところであったであろう。彼が母親や伯母たちとこの少し広い最後尾の家族席に陣取って、得々としている様子が目に浮ぶ思いがする。この「グレイの席」の正面、つまりポーチを入れて右手東側奥は、例の赤レンガのヘイスティングズ礼拝堂である。これはヘイスティングズ公 (**Lord Hastings**) の第二代ハンティングドン伯 (**2nd Earl of Huntingdon**) であるフランシス (**Francis**) が1557年*に、一つには教会のすぐ近くに同じフランシスが建てたばかりだった救貧院 (**almshouse**) の付属礼拝堂 (**oratory**) として、また一つにはヘイスティングズ家の納骨堂 (**burial place**) として用いることを目的に建てたものだ。この救貧院は教会の南側にあったといわれるが、1765年に荘園領主トマス・ベン (**Thomas Penn**) が取払った**という。ヘイスティングズ礼拝堂入口の上には、建立者ヘイスティングス公の紋章 (**coat of arms**) が掲げてある。この入口の近くに、12,3cのものといわれる古い平墓石 (**flat tomb stone**) が置かれている。これは境内の墓地で掘出されたものだという。それにはノーマン・フレンチ (**Norman French**) の刻文がある：「ここを通りすぎるものは、みなこの人のために祈れ：その名はウィターマースのウィリアム (**William Wytermerse**) という。彼に神の真のお許しあれ、アーメン。」グレイの「エレジ」の一景を思い起こさせる。彼もまたこの最古の墓碑に、想いをいにしえに馳せたかも知れない。この礼拝堂の西

* **WILLIAM PENN THOMAS GRAY AND STOKE POGES**, by F. McDERMOTT. p. 35.

** 教会のパンフレットには 'Molyns'

* 教会で入手したパンフレットには1558年とある。

** トマス・ベンは新しい **almshouse** を教会の北、400メートルばかりのところ建てている。

端窓際を不釣合いなパイプオルガンが、天井にまで達して、塞いでいるのはいかにも当世風だ*。

この南側廊とヘイステングズ礼拝堂の北側が内陣と本堂の並びだ。この中央の並びが教会では最も古い部分だ。しかも故人の名前を刻んだ数々のタブレットや紋章碑文が、壁という壁から支柱にまではめ込んだり、掛けてあったり、花が生けてあったりで、最も華かな領域だ。本堂は4本の支柱に囲まれた領域で、西正面入口 (West Front) からまっすぐ内陣奥の祭壇に向け通路。その両側に信徒席 pewが並んでいるのは既述の通りだ。ポーチからまっすぐ進んでこの通路にぶつかると、すぐ左手 (西側) に八角形の大きな石の洗水盤 (Font) が通路中央に立っていた。この旅ではいくつか font を注意して見て来たが、この font はいやみのない最も見事なものの一つだった。蓋がしてあり、その上に花が生けてあった。この洗水盤の下手の西端 (West End) は 11c の建築だという。その西正面入口は、正面祭壇に相對持し、本来教会の表入口である筈だが、今は塞がれ、例によって第二次世界大戦戦没者追悼の「記念の窓」 (A Memorial Window) となっていた。この窓にはギリシヤ時代の自転車に似た玩具ホビー・ホース (hobby horse) に裸の男が乗り、ラップを吹いている図柄の彩色ガラス (painted glass) が入っていて、一名、'Bicycle Window' (自転車の窓) とも呼ぶ。この西端窓 (West End Window) から正面をみると、本堂の左手奥の角に支柱と壁を背負って木製の pulpit (説教壇)、その右隣りには木の lectern (聖書台) が見える。正面の本堂と内陣を仕切るアーチ形の白い壁面の向うには、明るい派手な色調のステンド・グラス、その下に祭壇。祭壇の前には何の花か、左右に黄や白やピンクの花が花入れに配してあった。上方はとみると、黒々とむき出しの火打石と割栗石の壁、屋根を支える大きな梁の丸太、太い長押。1897年の大改修で天井を取っ払った結果だ。その包み隠しのない屋根裏は素朴さと力強さを感じさせる。グレイの時代には天井が張られ、この屋根裏は隠されていた訳だ。本堂中央の支柱の附近に、グレイと親しかった荘園領主コップラム夫人のタブレットがある。その近くの南側廊との境界辺りに、このコップラム夫人およびペン家の地下納骨堂へ下りる入口がある。ペン家の納骨堂には Thomas, John, Granville 等が眠るが、その始祖とも云うべき William Penn (ペンシルヴァニアの

* このヘイステングズ礼拝堂は1946年から48年にかけて、大修理が行なわれている。

建設者) だけは、ここから 6.7 マイル北の Jordans の Quaker 教徒の共同墓地に眠る。pulpit の裏側、内陣北側の壁面に、第一次大戦戦没者の追悼記念碑がある。また、この教会の事実上の建立者ジョン・デ・モウリンズ卿 (Sir John de Molyns) の墓がその壁中にある。聖物置棚 (Easter Sepulchre) 様式の変った墓だ。

本堂の北に、更にもうひと並びの領域がある。この北の並びは本堂の長さしかなく、他の2つの並びより内陣の長さだけ短い。この西半分が北側廊 (North Aisle) で南側廊の半分の長さしかない。東半分の正方形の区域はタワー下である。この上の四角なフルマン風の塔は、もともと今日見るような平たい塔 (flat tower) であったが、グレイの時代には空に鋭く聳え立つ尖塔 (spire) を頂いていた。この尖塔は、グレイが生れる少し前の1702年にこの上につぎたされたもので、木造であった。その後、1831年に一度建てかえられたが、傾き危険なため、1924年除去された。当初の姿に復した訳だ。また、グレイの時代からつたのからまる塔 ('ivy-mantled tower') として知られていたつたも、近年になって (おそらく教会全体の屋根を大修理した1969年頃か) 塔をいためるというので完全に取除かれてしまった。

塔の下の正方形は鐘撞室 (ringing chamber) であったが、19c初頭に時の荘園主ジョン・ペン (John Penn) が荘園地主専用の家族席に変え、鐘撞室はその上に造った。現在、この一階 (ground floor) は「ペン家専用家族席」(the Penn Pew) とか「荘園領主邸宅専用家族席」(the Manor House Pew) と呼ばれている。この壁にはペン家の人々の紋章 (hatchment) やラテン語による家訓などが掲げている: DUM CLAVUM RECTUM TENEAM. (我に正義と栄光の道を守らせ給わんことを)。かつて、この地主家族席の上方には 'free seats' と呼ばれる貧者のための棧敷席 (gallery) があったという。二階の鐘撞室の鐘は1938年に2個加わって8個になったという。

この教会には北裏にさらに2つの小さな付属の建物があり、渡り廊下 'cloister' で教会に結ばれている。一つは南の教会入口ポーチの真向いに当る北廊側 (North Aisle) 北面の入口から廊下で通ずる低い建物、ベスティビュール (Vestibule) だ。これは天井の低い広間で、荘園領主専用の控えの間であった。古くは荘園領主代々の世襲の私有物であった。ここの一部、紋章入りの立派な窓ガラスは、18c末にすぐ北の領主邸宅マナー・ハウスを取り壊した時、持込まれたものとか。渡り廊下の cloister はオークの羽目張りで、4つの窓をもつ。そこ

にあるという*1643年の古い ‘Bicycle Window’ は、実は前述の本堂は西正面 (West Front) の「記念窓」に見えるものことではあるまいか。この廊下から入る北入口は荘園地主一族の専用入口なのだ。

もう一つの付属建物は塔の東奥にあるベストリー (Vestry) である。これは一般に祭服室といわれ、この教会の牧師ハリス師 (Rev. Harris) によると、「聖職者及び聖歌隊員が法衣を着る部屋」(‘the room where the clergy and choir robe’) だという。以前は、牧師と教会世話役 (church warder) が教区の問題を話合う場所としても用いたという。このベストリーの建立は1907年と新しく、chancel (内陣) の北面の入口に渡り廊下 cloister でつながっている。

教会を出がけに、ポーチの中の売店で、グレイ手書きの「エレジー」稿本の復写を3部求めた。ペンブルック稿本 (Pembroke MS.) とみた。ポーチを出ると、すぐ前に一抱えも二抱えもあるひととき大きなイチイ ‘Yewtree’ が立っていた。その左手に2つ3つレンガでなく石造りの箱型墓石が並んでいた。その背後に、土地のおばさんであろうか、別の店を開いてみやげものを並べている。そこでも、グレイの肖像やジョン・デ・モウリンズのブラスや教会などを図柄に配した皮のブック・マークを少々買った。すると、そのおばさんが、例の大きなイチイの木を指さして、樹令は1,000年以上、グレイはその下で「エレジー」を書いた、とガイドに早変わり。さらに彼女は境内の西南の一角に、まるでしだれ柳か葛のようにだらりとその青い枝葉を垂れている樹を指差して、あの下にマナー・ハウスの二人の召使いの墓があるという。あれは何の木だと尋ねると、ウィーピング・ビーチ (weeping beech) だと答えた。いかにも泣いているが如くしだれている。近寄ってみると、そこいらは苔むした平墓石 (flat tomb) がいくつもあった。どれも誰のたか確める暇もなく、カメラにだけはおさめた。だが、この泣き濡れるぶなの下には確かに、グレイが「なが物語」(‘Long Story’) に注まで付けて名を挙げている地主邸マナー・ハウスの家政婦タイアック (Tyahcke, house wife) と執事グルーム (Groom, steward) が眠っているのだ。「なが物語」の103行で、‘Styache has often seen the sight.’ (スタイアックはその光景をよく見ている。) ; 116行で、‘And all that Groom could urge against him’ (グルームがやり込めていうどんなことをも「論破して」), とうたわれている。グレイ

イはここで家政婦の名前を間違えているらしい。本当の名はタイアック (Tyache)。ジョン・シャープ (John Sharpe) の「グレイ詩集」(Gray’s Poems; London, 1826.) は注を付して、この名前は教会境内の彼女の墓石や教区内の同時代人の話から明らか。家政婦は大い ‘Mrs’ を付して呼ばれるため、最後の ‘S’ がグレイに間違っって聞き取られ、誤記されたのであろうと云っている。

売店のおばさんのガイドに別れを告げ、まっすぐなコンクリート舗装の小径をもどる途中、先刻のグレイ母子の墓を左に見て、もう一度そばへ寄る。後髪を引かれる思いだ。舗装はグレイ墓を守るかのように、その周囲ぐるりにおよび、隣りのダックワース師はわずかに一部だけ、その恩恵に浴しているばかりであった。向いのグレイ埋葬を教える刻文が埋め込まれたヘイスティングス礼拝堂の窓下には、ペチニアが赤や黄や白の可憐な花をつけ、文字通りその霊前に花を供えていた。立ち去るにあたり、手向けに「エレジー」のあの墓碑銘を口遊みたい衝動を覚える。このグレイの墓にふさわしい墓碑銘は、彼自身の筆になるその Epitaph 以外にありえない気がしてならなかった。墓石の側面にでも彫込んでおきたいものだ：

Here rests his Head upon the Lap of Earth
A Youth, to Fortune and to Fame unknown :
Fair Science frown’d not on his humble Birth,
And Melancholy mark’d him for her own.

(ここに地を枕にして眠っているのは
幸運にも名声にも知られなかった若者だ；
その生れ卑しくも学問は眉ひそめず
憂鬱はしるしして我がものとした。)

—Elegy : 117—120

このグレイの墓から少し離れたところに、朽ち果てて、半ば倒れた二本の木の支柱にわたされた分厚い板がころがっていた。早速、P. ミルワード教授が実演を試みさせた。本来ならもう一枚同様の板がなければならぬのに、壊れてなくなっていた。‘stocks of punishment’ (仕置台) という。これは罪人や背反者を懲らしめる道具で、土中に二本の柱を立て、それに2つまたは4つの穴を横にくった二枚の厚板を向い合わせにしつらえる。両足 (または、両手両足) を下の板のくった穴に置き、上からも一枚の板で押えつけて苦しめる装置だ。

* Blue Guide ENGLAZD (Benn, 1972) ,p. 283

教会の境内など公共の場に設けられる。今日では、用のない過去の遺物で、例えば **Corby Pole Fair** (コービー棒まつり) とか **Corby Charter Fair** (コービー特許まつり) といったお祭りごとでしか用をなさない。これは町へ入る道路全部を頑丈なバリケードで閉鎖し、町へ入って来る者から通行税を取る、拒絶すると、男なら丸太棒 (pole) に跨がらせ、女なら椅子に乗せて町の三ヶ所に設けてある 'stocks' へ連行し、払うまでその仕置台に掛けるというもの。時にはただの町内の通行人でもつかまえて、それ相応の身代金を求めることがあるという。ちょっとふざけすぎた祭ではある。Corby は Northamptonshire の町で、この祭りは20年毎の Whitmonday (聖霊降臨祭 Whitsunday の次の月曜日) に行なわれる。今回は1982年だという。

Gray's Monument この教会墓地に別れを告げ, lychgate (墓地門) を二つ抜けると、すぐ左手の木立の中へ消える一筋の小道に気づく。その入口の上に、二本の鉄柱に支えられた板がグレイ記念碑 (Gray's Monument) を示す: NATIONAL TRUST / FOOTPATH TO THOMAS GRAY'S MONUMENT. この記念碑は教会境内の北裏に隣接する今日 Gray's Field と呼ばれる野原の東側の一角に、1799年 John Penn がグレイのために建てたグレイ顕彰碑である。入口から木立の中へ小道を 100メートル足らず進めば、その碑の前に出る。当時の大建築家 J. ワイアット (John Wyatt) の設計デザインとか。白い石の祠のような冠を載せた大きな四角い淡黄色の 'freestone' の台石は、あのケンブリッジのピーター・ハウスの建材石と同じ Lime stone か。その台石の四面に刻銘がある。正面、南側の面には、ジョン・ペンが撰じたか、今日、次の顕彰碑文がある:

THIS MONUMENT,
IN HONOUR OF THOMAS GRAY,
WAS ERECTED A. D. 1799, AMONG
THE SCENES CELEBRATED BY THAT
GREAT LYRIC AND ELEGIAC POET.
HE DIED JULY 30th 1771, AND
LIES UNNOTED, IN THE CHURCHYARD
ADJOINING, UNDER THE TOMBSTONE ON
WHICH HE PIOUSLY AND PATHETICALLY
RECORDED THE INTERMENT OF HIS
AUNT AND LAMENTED MOTHER.

(この記念碑は、/トマス・グレイのために、/そ

の偉大なる抒情詩挽歌の詩人により/うたわれしところに、/1799年建つ。/彼は1771年7月30日に没し、/隣接する教会墓地にひっそりと眠る。/その上の墓標には/その伯母と今は亡き母の/埋葬を心をこめて切々と/自らが記す。) 一下線は筆者。

上の碑文中、「1771年7月30日没す」('HE DIED JULY 30th 1771,') というのは、ブラッドショー (John Bradshaw) によると、19c 末には「7月31日没す」(He died July 31, 1771;) となっていたことが分かる。彼はその著「トマス・グレイ詩集」の中*で、この南面一面の刻銘全文を掲載している。そしてその「31日」にわざわざ注を付して、その誤りを指摘しているところを見ると、ブラッドショーの写し間違いとは云えまい。当時の碑文は誤って、グレイの死亡日を「31日」と記していたという他ない。ブラッドショーは注の中でこのグレイの死亡日の誤りはそれまでにいくつかのグレイ伝に見られる、と云っている。これはそもそも1775年のメイソンの「想い出」('Memoirs') の次の個所によるとしている: **...on the 29th he was seized with a strong convulsion fit, which, on the 30th, returned with increased violence, and on the next evening he expired.' (29日に強いひきつけの発作に襲われ、その発作は30日にも一層激しさを加えて再びおこったのであったが、その次の夜、彼は息を引取った。) メイソンのこの文章がことの誤解の生ずるものになったのは否めないが、メイソンばかりにその責任を負わず訳には行かない。それよりも先に、前にも触れた1772年にドッツレーから出た「年鑑1771年」(Annual Register for the Year 1771) の死亡欄 (p. 179) がすでにグレイの死亡を7月31日としている:

* The Poetical Works of Thomas Gray (ed. with an introduction, life, notes, and, a bibliography by John Bradshaw; George Bell and Sons, 1904), p. lvii. (初版は1891年)

** The Poems of Mr. Gray. To Which Are Added Memoirs of his Life and Writings, by W. Mason. in four volumes. (York. 1778), Vol. IV, p. 232
ブラッドショーの引用文は次の通りである: 'on the 30th the fit returned with increased violence, and on the next evening he expired.'

July 31 Rev. Dr. Thomas Grey, LL. B. Professor of Modern history and languages in the university of Cambridge, well known for the elegance of his poetry, particularly for his celebrated elegy in a country church-yard.

(7月31日 トマス・グレイ博士尊師。法学士。ケンブリッジ大学近代史及び近代語教授で、その詩の美しさ、とりわけ、その有名な田舎の教会墓地に於ける挽歌で知られる。)

こうしてグレイ死亡当初から、この31日死亡はかなり広く信じられていたものと思われる。

この南面の左右両隣、つまり教会に対する西面と反対側の東面とは、「エレジー」からの詩行が各8行づつ刻されていて、先のブラッドショーの引用と変らない。西に‘Hard by yon wood, now smiling as in scorn,’ (あちらの森のすぐそばを、ある時は嘲けるように笑いつつ) ではじまる第27スタンザ4行と、‘One morn I miss’d him on the custom’d hill,’ (ある朝、いつもの丘にその姿が見えなかった) ではじまる第28スタンザの4行。東面の詩行は‘Beneath those rugged elms, that yew-tree’s shade’ (あのかついでレの木の下、あのイチイの木蔭に) ではじまる第4スタンザの4行と、‘The paths of glory lead but to the grave’ (栄光もすべてその道は墓に終るのだ) でおわる第9スタンザの4行。

よく問題にされるこのすぐ前の行は、‘Await alike the enevitable hour’ (l. 35) 「避けえぬ死の時を等しく待っている」となっている。‘Awaits’ではない。ブラッドショーはこの記念碑の‘Await’には一言も触れていないが、その「トマス・グレイ詩集」のテキストの注ではこの問題に言及している*。この動詞の主語は行末の‘hour’ とすべきか、前行2行ととるべきかの問題である。少なくともグレイ自身は「避けえぬ死の時を待っている」ではなく、「避けえぬ死の時^が待っている」とよんでいたことは確かだ。グレイ自筆のペンブルック橋本 (Pembroke MS.) や、彼の最初の全詩集ともいうべき1768年の自注付き「グレイ詩集」 (Poems by Mr. Gray) では‘Awaits’だ。しかし本人以外の編者による古い詩集では‘Await’が圧倒的に多い。手許にあるものから、その例をいくつか列挙すれば次の通り：

* 前掲の書, The Poetical Works of Thomas Gray, pp. 219—220

A Collection of Poems in four volumes, By several hands. London. Printed by J. Hughs for R & J Dodsley. 1755; VOL. IV, p. 2

Poems by Mr. Gray, a new edition, printed for J. Murray. 1776. p. 139.

The Poems of Mr. Gray. To Which Are Added Memoirs of his Life and Writings, by W. Mason. in four volumes. York. 1778. Vol. I, p. 77

The Poems of Mr. Gray. with Notes by Gilbert Wakefield, London. 1786. p. 161

The Poetical Works of Thomas Gray. London: Printed for John Sharpe. 1826. p. 52

ブラッドショー自身は、同じ編著書「トマス・グレイ詩集」中の「エレジー」* では‘Awaits’を採用し、注を付して Await の最も古い例は上記「ドッグレー詩集」の1755年版だと云っている。19c になってもメイソンの流れを汲むマサイアス (T. J. Mathias) やミットフォード (J. Mitford) など、いわばグレイ研究の古典派は「避けえぬ死の時を待つ’Await’ とよんでいる。グレイの諷みに従って、「避けえぬ死の時が待つ’Awaits’ に定着してきたのは、19c末から20c初めにかけてのトウヴィ (D. C. Tovey) やブラッドショー (J. Bradshaw) など、いわば近代実証派の出現を待ってからのことのように思える。

グレイ記念碑の残る一面、北に向いている面には、今日、Eton Ode (「イートン校遠望のうた」) の巻頭2行 ‘Ye distant spires, ye antique towers, / That crown the watry glade,’ (お前たち遙かなる尖塔よ、いにしえの高塔よ / 水ぎわの森に聳えて、) と、‘Ah happy hills, ah pleasing shade’ (ああ、楽しかりし丘よ ああ、うれしかりし木蔭よ) ではじまる第2スタンザの最初の6行 (ll—16) の8行が刻まれている。しかし、ブラッドショーの記すところでは、この面は巻頭2行と第2スタンザのはじめ4行の6行だけ。現在の刻銘に比べて2行足りない。ブラッドショーはこの北面の引用詩行だけは、全6行をそっくり転写して、グレイ記念碑のこの面に刻された詩行を誤認引用しているハウイット (W. Howitt) に対する反証としている。ブラッドショーはハウイットがその著書「英国詩人のふるさととゆかりの地」 (Homes and Haunts of the British Poets**)

* 同書, p. 44

** WILLIAM HOWITT. Gray, at Stoke Pogis. In his Homes and haunts of the most eminent British poets. London. R. Bentley, 1847.

で、この北面の刻銘に **Eton Ode**（「イートン校遠望のうた」）の巻頭16行（II. 1—16）を途切れず引用しているのは誤りだと指摘し、さらに東面でも彼は「エレジー」の第4，第5スタンザを与えて誤りを犯している、と云っている。ハウイトの初版本が1847年の出版で、ブラッドショーの初版の1891年との隔りを考慮に入れても、やや眉唾物的感じの拭えぬハウイトはともかくとして、ブラッドショーの碑文証左は無下に無視できない。だとすると、ストウク・ポウヂズのグレイ記念碑は少くとも南北両面は前世紀末と現在とではやや異っていたと考えるほかない。南面の「31日」が「30日」に、また北の面の **Eton Ode** からの詩行6行が8行に、いつどのようにして変わったのか不思議でならない。今世紀に入っていないのか、この南北の刻銘板は取りかえら

れたものとするほかない。それとも古い刻銘板にそのまま追加訂正が施されたのであろうか。もしまた、ハウイトの言辞にも間違いはないということにでもなれば、一度のみならず二度までも刻銘板はとりかえられたことになる。

グレイ記念碑の入口から教会境内の方を振りかえると、わずかに木ずえをかすめて見える教会堂の赤い屋根とつたのないむき出しの四角の塔が、印象的で名残り惜しい。この教会は、今日、洗礼、結婚などの儀式に用いられるほかに、毎日曜日のミサも行なわれ、会衆も多い（‘well attended’），とハリス師は云っている。（次号へつづく。）

（昭和54年9月8日受理）